
おじいさんと私

迎千鶴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おじいさんと私

【コード】

N3067Q

【作者名】

迎千鶴

【あらすじ】

ある日、「私」は本を探しているらしいおじいさんに気付く。おじいさんは、毎日毎日、同じ時間にやってきては帰る。そんなおじいさんのことが気になった私は。

(前書き)

どんな仕事をしているのか、などは、できるだけ、分からないように書きました。

名前も勝手に想像してください。

私がおじいさんの存在を知ったのは一か月前だった。

そのおじいさんは、いつも何かを探しているようだった。

いつのまにか、私はおじいさんのことを気にかけるようになった。

私がおじいさんと初めて喋ったのは、三週間とちょっと前だった。

私は、何の本を探しているのか、気になり、おじさんに近づきました。

「こんにちは。」

「…こんにちは。」

おじいさんは少し驚いた感じだった。

「何の本を探しているんですか？」

「さあ…。」

「教えてください。お手伝いしますよ？」

おじいさんは、時計を見るなり、私のことを気にせずに、スタスタと出口まで歩いて行った。

私がおじいさんにつきまとう？ いや、かまうようになったのは、

その次の日から。

おじいさんは決まった時間にきて、一時間経つと帰って行った。

最初は私の行為に驚いたような感じだったが、徐々に覚えていく

れた。

「おじいさん。」

「なんだ？また、お嬢さんかい？」

おじいさんは、本棚から目を離さずに言った。

「羅生門はどうでしょう？」

「そんなものは、読んだよ。」

「ん〜、じゃ、夏目漱石の「こころ」は？」

「なんだ、そんなものも読んだことないのかい？」

おじいさんは、バカにしたように言う。

「読んだことありますよ。」

「じゃあ、先生は結局、亡くなったのかな？」

「え？」

予想外の質問に、驚いてしまう。

「先生は…「わたし」に手紙を書いて、その手紙の最後で、こころは終わってるんだ。」

「…先生はきつと、亡くなったんじゃないですか…？」

「まあ、そんなことは、夏目漱石しか知らないことだがな。」

おじいさんは、時計を見て、スタスタと帰って行った。

「ちよつと、待っててください。どういう意味なんですか？」

「どういう意味か…一人で死ぬほど、先生は強かったのかな…という意味かな。」

おじいさんは、そう言うと、手を振って、帰った。

そんなことは初めてで少し戸惑ったが、おじいさんの背中はいつもより、寂しそうだった。

私がおじいさんを道で見つけたのが、二週間前だった。

図書館からの帰り道。

いつもより、早めに帰ることになったが、夏場なら明るいであろう時間帯だ。

しかし、今は冬場だ。

息をするたびに白い息がでてくる。

「おじいさん？」

見なれた背中に言うと、ゆっくりと振り返る。

「おお、もう終わったのかい？」

「ええ、どうしたんですか？」

図書館の隣の豪邸の前に座っていた。

「いつもより早いんだね。」

「まあ…。家に帰らないんですか？」

「ああ、わしは、ここに住んでいるんだ。」

豪邸を指差す。

「え？」

少し驚きながらも、よく見る。

庭から生えた木々たちが私が見ることを拒んでいるようだった。手入れもされていなく、木々たちはのびほうだった。

「わしは、一人で住んでいる…。」

「…。」

何も言えなかった。

こんな広い家に一人というのは、どんな気持ちなんだろうか…。

寂しい それ以外あるのだろうか？

「わしが図書館に探しにいつているものは 人間だよ。」

「人間？」

「わしは、寂しい 誰でもいいから、人を見たい。同じ空気をすいたい。」

何も言えなかった。

私は 寂しいなんて、思ったことがない。

家にはいつも誰かがいる。

小さいころだって、お母さんが帰りを待っていてくれた。

につこりほほ笑んだお母さんの顔を思い出す。

「一人…それはとても寂しいことだ。そして、一人で死ぬということも。」

「死ぬって、おじいさんは、まだまだ元気じゃないですか。」

笑って言うと、おじいさんは哀しげに笑う。

「孤独死という言葉を知っているかい？」

「はい…。」

一人暮らしの老人が誰にもみとられずに、亡くなること…。

「わしは、それが一番寂しいと思うんだ。」

「あの失礼ですけど、娘さんとか息子さんは？それに、奥さんは。」

「女房は、空にいる。それに、子供たちは、わしの元を飛び立った。」

夜空を見上げる。

なぜか、星は見えなく、風がピュツと吹く。

「帰ってほしいと思わないんですか？」

「思わないと言ったら、嘘になるな…。」

「だったら…。」

「親のために、仕事を変えるなんて、そんなことしてほしくないんだよ。」

「それでも。」

私はそれでも食いで下がる。

「自分のもとを飛び立った鳥は、もう帰らない。帰ってきてはいけないんだ。」

「…。」

「鳥を飼ったことはあるかい？」

「ありません。」

「鳥は、籠の中に入れていた時よりも、部屋に放したほうが、とてもうれしそうなんだ。」

籠の鳥は、いつか空を飛べなくなると聞いたことがある。

「わしの可愛い鳥を籠になんぞ、いれたくなくてな。」

可愛い子供を鳥と表すおじいさんは、なんだか嬉しそうだった。

おじいさんが図書館に来なくなったのは、一週間前。

そして、今日、おじいさんが亡くなったことを聞いた。

一人、静かにベットの上で亡くなっていたそうだ。

老衰だったらしい。

おじいさんが「こころ」という作品で感じたことは、一人で死ぬ怖さだったのだろうか？

それとも一人で死のうとできる、先生の強さだったのだろうか？

いや、先生は、強くなかなかったのだ。

死ぬことを強いことなんて、思っではいけない。

死ぬことは 逃げること…。

おじいさんは、死という恐怖から逃げなかった。

むしろ、戦ったのだ。

自殺をした先生と老衰で死に恐怖を感じながら、亡くなったおじいさん。

どちらが強いのだろうか？

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3067q/>

おじいさんと私

2011年1月26日13時58分発行